●不動明王大祭法話

〈いのちの尊さ〉

鎌倉市長谷寺顧問
佛画教室半徳会主宰
吉田雄鳳

今ご紹介いただきました吉田ゆうほうです。まだ頭を剃って五年半という、先輩方と比べると赤子のようなものでございますが、よろしくお願いいたします。

私自身、ずっと善光寺で法を説くのを願っておりましたが、今日ここでみなさま方とお会いできたのも、ありがたいご縁であると思い感謝しております。

道元禅師は、人間命分あり、福分あり、食分ありとおっしゃっておられます。人間は生まれながらにして、また生活環境によって価値観がちがうものでございます。一番大切なものは何か、と聞かれたとき、お金や地位という人もいるかもしれません。しかし、一番大切なものは命でありましょう。頭を剃ってからまだ日も浅い私でありますが、私なりに仏教を見、釈尊は我々に何を教えたかったのかということを考えてまいりました。オギャーと生まれてから涅槃に至るまでの命、この一番尊い命をどう生かしていったらよいのか、をお経に説いておられる

と思うんです。

道元禅師の正法眼蔵も、命の尊さを示したものであります。修証義第一章第二節のお言葉に示されているように、「人身うること難し、仏法おうことまれなり、今われら宿善のたすくるによりてすでに受け難き人身を受けたるのみにあらず、あいがたき仏法にあいたてまつれり」とお教え下さっております。人間としては仲々生まれてこれない。さらに仏法にふれることができたのはもっとありがたいことである。というわけです。

法句経というお経にも「人の生をうくるは難くやがて死すべきものの今命あるは有り難し。正法を耳にするは難く諸仏の世にいずるも有

り難し」という一句がございます。

釈尊が弟子のアーナンダと諸国を旅していたある日、ガンジスのほとりにやって来ました。その時仏陀は、「アーナンダよ、河原の砂を手いっぱいすくってみなさい」といわれました。そして手にすくった砂をごらんになった釈尊は、「そなたが持っている砂の数と地球全体の砂とどちらが多いか」とアーナンダに問われたのです。アーナンダが「もちろん地球全体の砂に決まっています」と答えると、釈尊は「地球全体の砂の数を諸々のもの達の命と考えたとき、人間として生まれてくるのは、そのひと握りの砂にすぎないのだ。」と言われました。「ではアーナンダよ、その砂を爪の上にのせてみなさい」と言われましたのでアーナンダはなるべくたくさんの砂を爪の上に乗せようとしましたが、ほんの少ししか爪の上には残りませんでした。それを見て釈尊は、「アーナンダよ、爪上の砂こそ、仏法に会える人の数だ」とおっしゃったといいます。人身うること難し、仏法おうことまれなり、仏の法にふれることはまことに有り難いことなのであります。

阿含経にも、盲亀浮木のたとえとあるように、目の不自由な亀が、一〇〇年に一度大海原の底から海面に上がって来るときに、たまたま浮いている木の穴に首を突っこんでしまうという、本当にまれであることのたとえなのですが、それぐらい、人間として生まれてくることは尊く有り難いものです。この尊い命をあずかった私達は、やはり尊い生き方をしなければなりません。

杭州の刺吏（知事）をしていた白楽天は、秦望山の道林禅師（木の上で坐禅をしているので鳥窠和尚とも言う）より、『諸悪莫作　衆善奉行　自浄其意　是諸佛教』の生き方をしなければいけないと教えられました。白楽天は、そんなこ

とは三歳の子供でも知っていることではありませんかと質き返したとき、道林禅師は「三歳の子供でも知っているが、実行するとなると八十歳の老人でも難しい」と教えられました。さすがの白楽天も頭を下げるしかなかったと聞かされたことがあります。

お釈迦様の悟りとは、縁の悟りであります。

彼生ずるによりて我生ずる
彼あるによりて我あり
彼滅するによりて我滅す

そして一切衆生に仏性あり、ということです。例えゴキブリでも仏性があるのです。では殺すべきか殺さざるべきか、というとき、それは「殺さざるを得ん」のですが、その時に、ゴキブリは役立たずだから殺していいとは思わないでほしい。いじめもしかりです。いじめをする子供を我々大人がいじめるのでは、顔についた墨汁を墨で洗うと同じことになってしまう。いじめっ子にもいじめられる子にも、仏性あり、とするそこから解決が生まれるのでしょう。

蚊も、仏性をもった生きものと考えると、殺しても当然という考えはなくなるはずです。その仏性をもったさまざまな命が、縁によって、いま生かされている。この命の尊さ、有り難さを今こそ感じなければならない時ではないでしょうか。